

4. 同心円地帯理論 (都市生態学)

都市の成長と同心円地帯理論

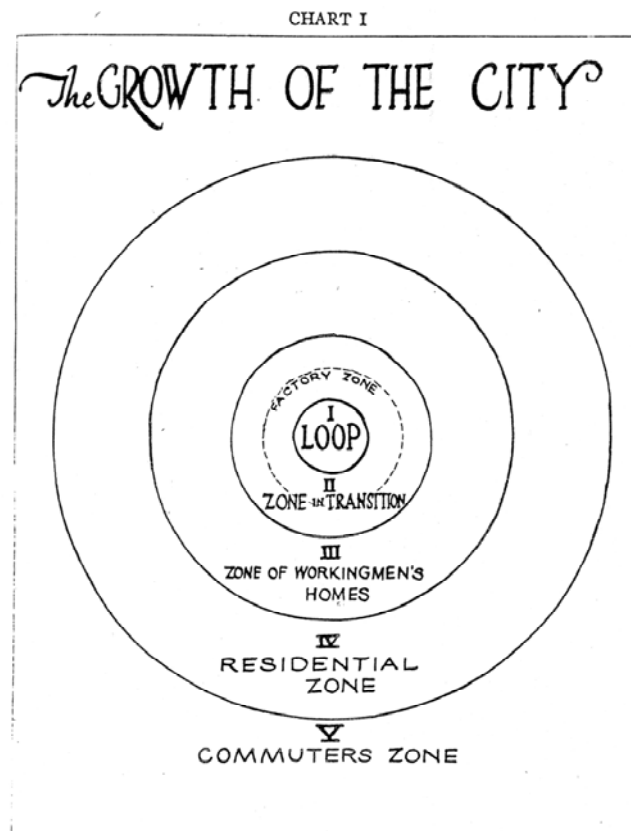
バージェスは「都市の成長」(1925年)のなかで、有名な同心円地帯理論を提唱。シカゴの都市成長の空間的パターンとシカゴ学派都市社会学の問題関心をわかりやすく示す。

●都市の空間的パターンを5重の同心円によって示す。

- I 中心業務地区 (Loop)
- II 推移地帯 (zone in transition) 軽工業地区、安価で劣悪な住宅地区。
- III 労働者居住地帯 (zone of workingmen's homes)
- IV 住宅地帯 (residential zone) 中産階級の住宅地域
- V 通勤者地帯 (commuters zone) 上流階級の郊外住宅地区、バンガローハウスなど。



<http://www.asanet.org/page.wv?name=Ernest+W.+Burgess§ion=Presidents>



●シカゴの同心円構造

ループ地区：ケーブルカーから高架鉄道へ。摩天楼、百貨店、美術館など。
都心の中心業務地区、商業地区。

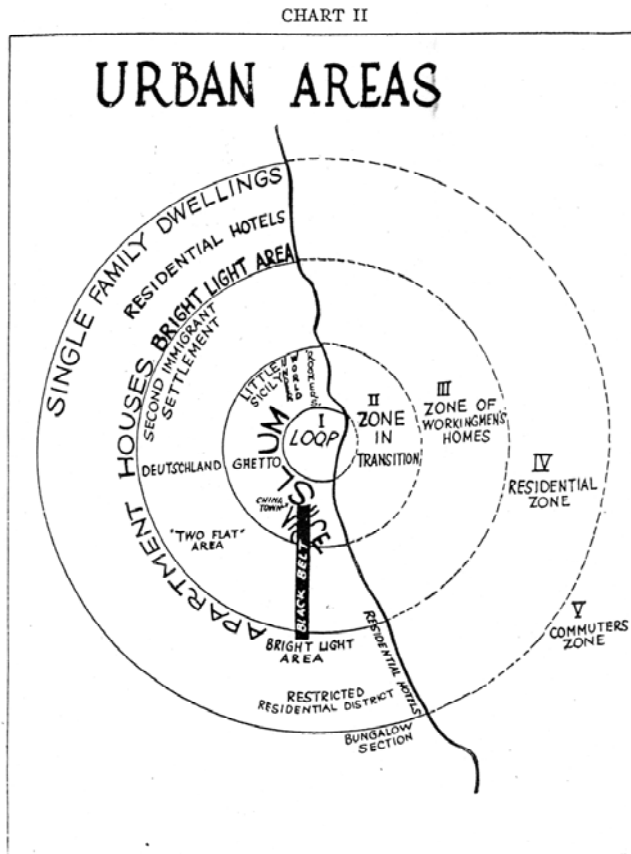
推移地帯：スラム、下宿屋街、暗黒街、リトルシシリー、ゲッター、チャイナタウン、悪徳地帯、ブラックベルト、グリークタウン、ピルゼン、劇場街リアルト、ラテン街。

労働者居住地帯：移民の二世帯の居住地。

ドイチュラント（ユダヤ人街）、2階建て住宅地区

住宅地帯：高級賃貸マンション地区、繁華街、排他的な高級住宅街

通勤者地帯：家族向け一戸建て住宅、居住用ホテル、バンガロー地区。



●都市拡大の動態

①社会移動の空間的過程としての居住移動——外へ外へ移動。

推移地帯→労働者居住地帯→住宅地帯

②都市そのものの拡大過程——同心円自体の拡大。

住宅地帯→労働者居住地帯→推移地帯→中心業務地区。

「侵入 (invasion)」「継承 (succession)」によるコミュニティの変化。

③移民の民族的モザイクから都市分業体系へ

移民の居住地のモザイクから、中心業務地区によって支配された分業体系へ。

集中化 (centralization) ——中心業務地区によって各地区が支配されていくこと。

離心化 (decentralization) ——都市が拡大し、都市機能の諸要素が空間的に分散していくこと。チェーンストアの展開など。

社会解体と再組織化——移民の社会組織の解体と、都市分業体系にもとづく再組織化。正常な場合、両者は均衡する。都市の拡大が正常な率を超えると、社会解体。

●調査方針としての同心円地帯理論

- ①数量的な測定——人口増加率、年齢・性別構成、流動性の測定（交通量、接触頻度、地価）→ Local Community Research Committee のプロジェクトへ。
- ②集中的なコミュニティ研究——ゲッターとドイツラントの比較研究。

都市生態学

のちに、都市のさらなる発展とともに、「セクター理論」、「多核心理論」などが提唱されるようになる。都市における居住分化や立地のパターンの研究を総称して都市生態学という。

(1) 同心円地帯理論とその修正

- ①金融業務地区 ②中心小売地区 ③卸売・軽工業地区 ④重工業地帯と労働者居住地区 ⑤住宅地区 ⑥通勤者地帯

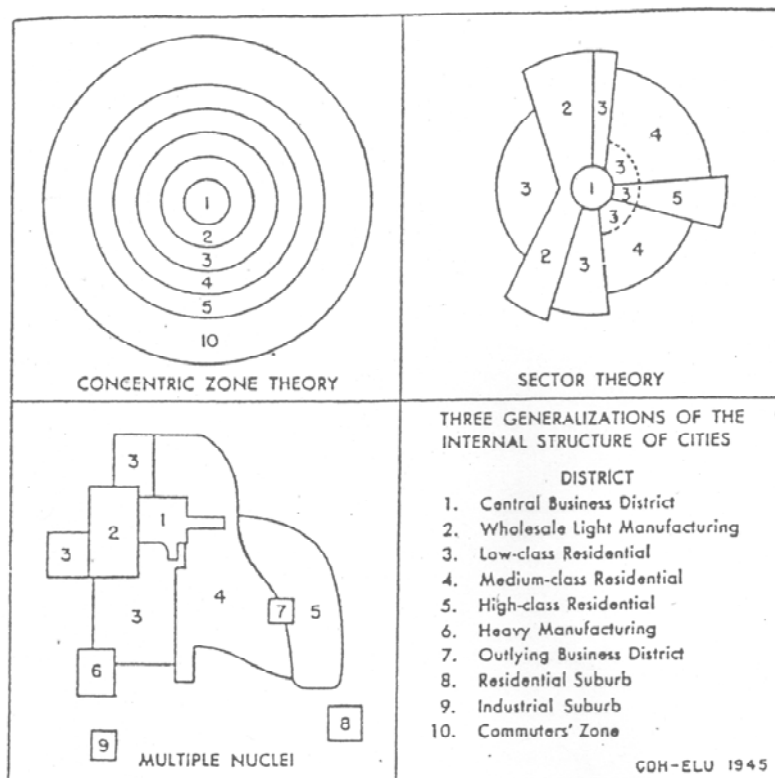


FIG. 1. Generalizations of internal structure of cities. The concentric zone theory is a generalization for all cities. The arrangement of the sectors in the sector theory varies from city to city. The diagram for multiple nuclei represents one possible pattern among innumerable variations.

(2) セクター理論

● H.ホイットが提唱 (Hoyt 1939)。

- ①放射線状に伸びる交通の軸線に沿って、特定の地域が外側にむかって扇形に展開する。
高級住宅街は、最速交通路線に沿って拡大する。
重工業地帯の周辺に労働者居住地域が展開。
- ②高速交通手段の発達、重工業の大規模な発展が、同心円理論の修正・否定をもたらした。

(3) 多核心理論

- ハリスとウルマンが提唱 (Harris and Ullman 1951)。
- ひとつの中心ではなく、複数の核を中心に、周囲の土地利用が決まる。
 - ①最初から複数の核がある場合：ロンドンのウェストミンスターとシティ
 - ②都市発展の過程で新しい核ができる場合：サウス・シカゴのカルメット川沿いの製鉄地帯。
- 核になるもの：小売地区、港湾・鉄道、鉱山、観光都市の海浜
- 核を中心とした立地の原理
 - ①施設へのアクセスの良さ
——工業地にとっての港、鉄道、広い区画など
 - ②集積の利益
——商業地
 - ③好ましくない利用の分離
——工業地と住宅地
 - ④地価
——安価なところは低所得者の居住地になる。

(4) 社会地区分析と因子生態学

国勢調査の地区別データをもとに、統計的に居住分化を検討する手法が 1950 年代に発達 (社会地区分析)。地理学の「等質地域分析」に発展。因子分析という分析手法を応用することから因子生態学とも呼ばれる。

社会階級による居住分化は同心円のまたはセクター的に、家族のライフサイクルによる居住分化は同心円的になる傾向が認められている。しかし、その理由は時代により、文化により違いがある。